

とともに…

R7. 11. 18

自ら考え挑戦し ともに高め合う 北杵築っ子の育成

秋を満喫 心の実いとともに… ～ウォークラリー遠足～

11月7日（金）、晴天に恵まれ秋らしい陽気の中、本校恒例のウォークラリー遠足を実施しました。

今回は、5つのなかよし班（1年から6年の縦割り班）で、一班ずつ7分の間隔をあけて学校をスタートし、目的地である北杵築コミュニティーセンターをめざすコースです。毎年同じコースにならないように、ゴールが違う3つのコースを想定している中の一つです。このコースは約6kmで、チェックポイントを8つ置いて教職員が立ち、安全確認とともに、子どもたちにはなぞかけクイズが提示され、子どもたちは問題を解きながら楽しくゴールをめざすことになります。

クイズは、例えば「11月10日は何の日でしょうか」等が出され、子どもたちは、班員で力を合わせて解きつつゴールをめざしていきます。道中は、クイズの解答を見つけるだけではなく、班員でしりとりをしたり、好きな食べ物や色を教え合ったりと、班ごとに会話を楽しみながら歩みを進めたようです。

全コースを5つの班が、全て無事に通過し、ゴールとなりました。

ゴール後、班の様子を職員から聞く中で、1班が道端に落ちているゴミを拾っていたということを耳にしました。そこで、1班のリーダーの5年生2人に様子を聞いてみることにしました。

すると、歩き進める中で、道端に落ちているゴミが気になりました。そこで、「いくつ落ちているのか数えてみよう」と数え始め、「1・2・3…30…」と途中まで数えていたものの、「きりがない。拾っていこう！」とリーダーが班員に投げかけたそうです。班の子どもたち全員が自分のゴミ袋をリュックから取り出し、ゴミ拾いを始めたというではありませんか。

私は、子どもの安全を見守るため車で巡回していましたが、1班は、7分遅れでスタートした次の班に追いつかれていたので、「ゆっくり歩いているのだな」ぐらいにしか思っていませんでした。

ところが、なんとゴミ拾いをしていたということ。一番にスタートした1班が、そのため次の班に追いつかれていたこともわかりました。

拾ったゴミを見せてもらいました。“かん”“びん”“ペットボトル”“たば



この吸い殻”等、たくさんさまざまなゴミが、子どもたちのゴミ袋に入っていました。素手だったので、ゴミが汚すぎて捨えないものもあったとも語ってくれました。

「びんが落ちていて危ないなあ」「ちゃんとゴミ箱に捨ててほしい」「ゴミ箱に入れた方が、道もきれいになる」と思いながら一つ一つゴミを拾ったそうです。

ウォークラリーで、落ちていたごみを拾い、道をきれいにしようという子どもたちの純真さに心打たれました。

“知行合一”という言葉を耳にしたことがあります。知識はそのままにしておくのではなく、実行・実践と結びついて初めて意味があるというような意味合いだそうです。“ゴミが落ちている”という場に出合えば、“ゴミを拾ってきてきれいにする”という知識はあります。ごみが落ちていると気づいても見て見ぬふりをしたり、さらにはゴミが落ちているという状況にも気づかなかったりすることさえあります。ウォークラリーという比較的楽しい行事の中にあっても、この子どもたちはこの問題をそのままにしておかず、班員全員で拾ってゴールしたのです。

「時間は気にならなかったの？」と尋ねると、予想時間を余裕で設定して、距離から考えゴミを拾っても十分得点圏内だと判断したらしいのです。ただただ感心しました。

子どもたちのこの優れた行いにみる確かな育ちが、ここにあります。さすが北杵築っ子！！

ご協力に感謝

地域の区長様には、子どもたちのトイレ休憩のため、鴨川公民館と中津屋公民館をあけていただきました。

また、保護者の方には、横断歩道に立っていただき、子どもたちの安全を見守っていただきました。

ご協力、大変ありがとうございました。

「けんかをやめると 友だちがいっぱいできて楽しくなります」 ～人権擁護委員による人権学習～

10月30日（木）1時間目、市内の人権擁護委員4名の方がおいでくださいり、1年生に人権に関する授業をしていただきました。

紙芝居「ずっとともだちでいいから」を題材に、スズメと仲良くするカラスを、他のカラスがうらやましがって、スズメやカラスをからかったりいじめたりする出来事を通して、嫌なことがあった時には“嫌だ・やめて”という自分の思いを相手にはっきり伝える大切さとともに、他者を傷つけることは絶対にしてはならず、おもいやりの心をもって接することの大切さに気づく学習でした。



学習の最後に、子どもたちが、「“やめて”“嫌”と言ったことがわかりました」「けんかをやめると、友達がいっぱいできて楽しくなることがわかりました」等感想を述べ、委員の皆様がこの授業で伝えたかったことを、子どもたちはしっかり受け止めたようです。